

落合仁司『構造主義の数理—ソシュール、ラカン、ドゥルーズ—』

ミネルヴァ書房（要約）

落合仁司

1.1 愛した、読んだ、過ぎた⁽¹⁾

哲学を何処から書き出すか。この問いは見掛け以上に深い意味合いを持っている。それは哲学が何に拠って立つかという問いを含んでいるからである。哲学は他の諸学分けても科学と同じ面と違う面を持つ。哲学は科学と同じように概念の体系である理論を構築する。しかし哲学はその理論の是非を科学のように実験や調査やデータ解析といった実証に拠って決定することは出来ない。それが出来るならば哲学を科学と区別する理由は存在しない。それでは哲学は自らの理論の是非を何に拠って決定するのか。

自らの経験、体験に拠る他はない。哲学は自らの生きられた経験 *l'expérience vécue*、生きられた時間 *le temps vécu*、生きられた世界 *le monde vécu* に拠って自らの理論を検証する。哲学は科学のように自らとの関係を遮断して収集されたデータの解析ではなく、自己自身の経験の反省、自省、内省に拠って立つ。これを現象学的方法と言い募りたくなる向きもあるに違いない。しかし自らの構築する概念の体系の是非を決定する方法に、自らの外部のデータ解析と自らの内部のデータ分析の二つを考えるのは極めて自然である。人間は環境に適応すると同時に自己を反省する。

したがって哲学の書き出しは自らの経験の反省からである。たとえばこう考えて見たらどうだろう。あなたは自らの人生において何を経験して来たと考えているか。あなたの人生とは言葉で表わすとすれば何だったと言えるのか。こういう問いはむしろ人生の最後に相応しい。自らの人生を省みて何だったのかと言い表わす、そのような言表を墓碑銘 *épitaphe* と言うのではなかったか。もちろん墓碑を作る必要は全くない。自然葬で充分だ。問題は自らの人生を言葉で言い表わすことである。

自らの経験、僕の経験を書く他はない。僕の墓碑銘は、

愛した、読んだ、過ぎた

である。後の議論の必要からフランス語でも書いて置こう。僕の *épitaphe* は、

Je l'aimais, Je lisais, Je passais

である。敢えて発音をカタカナにすれば、

ジュレメ、ジュリゼ、ジュパセ

となろう。もちろん意味は最初にした日本語の通りだ。

僕は愛した。僕の人生の中で愛は最も強烈な経験だった。僕は何を愛したか。フランス語の *Je l'aimais* には愛の対象 *la* あるいは *le* が言及されている。フランス語の愛する *aimer* という動詞は他動詞で対象 *objet* を要求するからだ。*la* は女性名詞で表わされる対象、*le* は男性名詞で表わされる対象である。もちろん人間の女や男やその部分も含まれるが、女性名詞あるいは男性名詞で表わされるものであれば何でもよい。LGBT はもとよりあらゆる型のフェティシズムが含まれる。愛の対象は多様だ。

僕は読んだ。僕の人生の中で読むことは仕事、職業だった。読むことはテキストを解釈する作業である。テキストは書かれただけでは完結せず読まれること、解釈されることによって初めて完成する。しかし同時に読むこと、解釈することは新しいテキストを書き下ろすことを惹起する。テキストを読みその読みを書くことによって新しいテキストが生まれる。こうして僕はいま9冊目のテキストを書き下ろしている。これが僕の仕事だ。

ただ僕の場合、ただ一つのあるいはただ一人のテキストを読んでその読みを書くのではない。ただ一人のテキストを読み込んでその解釈を書く人を専門家と呼ぶ。僕は専門家ではない。僕は複数のテキスト、それも極めて遠くにあると思われる複数のテキスト、たとえば哲学と数学のテキストを読んで、その読みそれもそれぞれのテキストの読みが交錯する読みを書く。それが僕の仕事だ。

僕は過ぎた。僕の時は過ぎた。僕の人生で大切なことは愛することと読むことだったが、他のこと、たとえば寝たり食べたりもした。それら全てのことを含めて僕の人生、過ぎされた時 *le temps passé* は過ぎた。フランス語の動詞 *passer* には、自動詞、過ぎると他動詞、過ぎすの二つの用法がある。他動詞、過ぎすは対象を要求する。たとえば時を過ぎす *passer le temps* である。前出 *le temps passé* の *passé* は *passer* の過去分詞で、これを自動詞と取れば *le temps passé* は過ぎ去った時、他動詞と取れば過ぎされた時となろう。僕の過ぎされた時は過ぎ去った。

この愛した時間も読んだ時間も含む過ぎた時間、過ぎされた時 *le temps passé* が、僕の

生きられた時間 *le temps vécu* であり、生きられた経験 *l'expérience vécue* であり、生きられた世界 *le monde vécu* であり、失われた時 *le temps perdu* である。僕の思考はこの過ぎられた時から出発し、精神分析や言語学や哲学や、幾何や代数や関係やの概念の交錯した体系を構築し、その是非を確かめるために再びこの過ぎられた時に回帰する。「過ぎられた時を求めて *À la recherche du temps passé*」である。

1.2 欲動、構造、仮象

愛することとはどういうことか。愛は人間を駆動する最も強い欲動である。欲動という言葉は初めて聴く向きもおられるかも知れない。欲動とは、フロイトが人間の行動を決定する最も重要な因子と考えた *Trieb* のフランス語訳 *pulsion* の日本語訳で、人間の行動を自らには制御しえない無意識の層から駆動し、決定するものである。フロイトのフランス語訳者たちは、拍動、脈動、パルスを意味する語根 *-puls-* からこの言葉を造語した。愛がビートを刻み、脈打ち、波のように迫り来る欲動 *pulsion* であるとは、フランス人訳者の面目躍如ではないか。

言うまでもなく愛は人間と共に、あるいは生命と共に太古から存在する。愛が人間を、さらには生命を駆動する欲動であることは誰もが気付いていた。しかし愛の欲動が人間を駆動する決定的な要因であることを明示的に述べるのは、20世紀初頭のウィーン、ジークムント・フロイトを待たねばならなかった。ここでパテントを争いたいのではない。愛の欲動に決定的な位置を与えた人間理解、精神分析の理論を創始したのがフロイトだったと言いたいだけである。爾来、愛を語る時に精神分析を避けて通ることは出来ない。

このフロイトの精神分析をフランスに導入し、後に述べる構造主義と融合させて、フランスの精神分析を確立したのが、フランス現代思想の主要なフィギュアの一人、ジャック・ラカンである。ラカンはフロイトの中心概念である欲動を無意識の主体 *S* と呼んで自らの理論の重要な位置に据えると同時に、後に述べるソシユール以来の構造の概念を大文字の他者 *A* と呼んで無意識の主体 *S* と並ぶ地位に置いた。ラカンに特徴的なことは、無意識の主体 *S* すなわち欲動の対象 *a* という概念である。愛の対象 *a* の多様性はラカンにとって本質的だった。

愛すること、それは僕の過ぎられた時において大切なことだった。その愛することを反省して行くと、欲動の概念が見出され、フランス現代思想の主要なフィギュアの一人、ラカンに辿り着いた。僕の愛の反省はラカンを読むことに至る。

それでは読むこととはどういうことか。読まれるテキストは言語で書かれている。何を当たり前のことをと思われるかも知れないが、テキストが言語で書かれていることは読む

ことの本質に関わる。ある言語で書かれたテキストを読むためには、その言語が読めねばならない。ある言語が読めるとは、その言語の語彙や文法といったその言語のコードが身に付いており、その言語のコードに自在に従うことが出来ることである。テキストはある言語のコードに従って書かれたメッセージである。読むこととはこのメッセージをその言語のコードに従って解読することの他ではない。

この言語のコードこそ言語学の第一義的な対象であると喝破したのが、20世紀初頭のジュネーヴ、フェルディナン・ド・ソシュールだった。ソシュールはこの言語のコードをラングと名付け、言語学はこのラングを先ず対象にすべきだと説いた。ラングが概念と聴覚映像の恣意的に結合された記号の価値を互いの差異のみによって決定する体系であるという、ソシュール言語学の中心的な命題は後で詳しく述べる。ここではラングが差異の体系として把握されることになるという予告で充分である。この差異の体系が後に構造と呼ばれ、ソシュールはこの構造を発見した最初の人、構造主義の祖として顕彰される。

このラング、構造に従って書くことあるいは読むことを、ソシュールはパロールと呼んだ。パロールはラングに拘束されて初めて可能になる。書くことも読むことも構造に拘束されることなしには成立しない。ラングに対するパロールを、構造に対する出来事と呼ぶことも多い。このラング、構造は人々の間に共有されている社会的事実であり、社会的事実は人々の行動を拘束することによってそれを初めて可能にする。ソシュールと一つ年下のエミール・デュルケームの思想は驚くほど近い場所にある。

読むこと、それは僕の過ごされた時において愛することと共に大切だった。その読むことを反省すると、構造の概念が見出され、フランス現代思想の源流の一人、構造主義の祖ソシュールに行き着いた。ソシュールは依然として過去の人ではない。

では過ぎることとはどういうことか。過ぎるとは時間が経過することである。もちろん過ぎるには空間を通過する意味もあるが、時間の経過と空間の通過は互換的である。

月日は百代の過客にして、行き交う年もまた旅人なり

時間の経過は人もものもことも変化に曝す。時間の経過において、不変の真実在を維持し、変化する仮初の見掛けに抗うことは困難である。もつともヨーロッパにおいて、いかなる時間の経過にも決して変化しない真実在の存在を堅く信仰して止まなかった思想がないわけではなかった。ホワイトヘッドをして全ての哲学はその著作の解釈に過ぎないと言わしめたプラトンと、このプラトン主義によって解釈されたキリスト教である。プラトンは真なる実在をこの世界にもたらし、この現実の世界は真実在の像、類似であると宣言し

た。キリスト教は神をこの世界にもたらし、この世界分けても人間は神の像、類似であると宣教した。

この真実在、神の存在にヨーロッパ思想史上初めて抗ったのが、19世紀末の北イタリア、フリードリヒ・ニーチェだった。この世界に真実在は存在せず、全ては見掛け、仮象に過ぎない。「神は死んだ」、この世界の全ての存在者は、永遠に回帰する時間の経過において、変化し続ける仮初の見せ掛け、幻想である。このニーチェの思想が、ラカンと同世代のピエール・クロソウスキーによってフランスに導入され、フランス現代思想の第二世代、分けてもジル・ドゥルーズに決定的な影響を与えることになる。

人間は見せ掛け *simulacre* である。このドゥルーズの衝撃的な思想は、フランス現代思想が人々を惹き付ける理由であると同時に人々に忌避される理由である。しかしこれまで見て来たように、人間は、自らには制御しえない無意識の欲動に駆動されて行動し、自らには社会的与件である言語の構造に拘束されて行動する。人間の行動は欲動と構造によって決定されている。これはたとえば人間は自らの意識的な目的を合理的すなわち効率的に達成すべく自らの行動を自由に選択すると考える、いわゆる合理的選択論が想定する人間像を真っ向から否定している。フランス現代思想は、人間はあたかも合理的に選択する自由な主体であるかのごとく見掛けられるが、その実体は欲動と構造に決定された何ものであると考える。したがって人間は、合理的な主体ではなく、その見せ掛けに過ぎないという命題は、フランス現代思想の極めて自然な帰結である。

ところで見せ掛け *simulacre* と見掛け *apparence* は別の言葉であるが、しばしば互換的に用いられる。この *apparence* を哲学用語として訳したものが仮象である。仮象は日本語としてこなれていないが、たとえば人間は欲動と構造に決定される仮象であるといった哲学的表現に向いているので、本書では見せ掛け、見掛けと共に仮象を多用する。

過ぎること、僕の過ごされた時が過ぎ去ったことを反省して見ると、仮象の概念が浮かび上がり、フランス現代思想第二世代の旗手、ドゥルーズに行き着いた。後に見るようにドゥルーズは、フロイトそしてラカンから欲動の概念を、ソシュールそしてレヴィ＝ストロースから構造の概念を、ニーチェそしてクロソウスキーから仮象の概念を承け継ぎ、それらを一個の思想に精錬することによって、フランス現代思想の頂点に立った。

愛すること、読むこと、過ぎることという僕の極私的に過ごされた時から出発して、僕たちは欲動、構造、仮象というフランス現代思想のキーワード、モクレに行き着いた。僕の過ごされた時は、フランス現代思想の言葉たちに辿り着く他はなかったのである。

1.3 多様体、構造群、商空間

フランス現代思想を数理的に表現するとはどういうことか。フランス現代思想を数理的に表現することは必要なのか、可能なのか、何を帰結するのか。最初に確認しておきたいことは、フランス現代思想の当事者たち、ラカンもレヴィ＝ストロースもドゥルーズも、自らの思想が数理的に表現されることに強い関心を懷き、自ら数理表現に乗り出していたことである。

ラカンが自らの精神分析の諸概念を代数（マテーム）的さらには幾何（トポロジー）的に表現しようとしたことは有名である。なるほどラカンの数理表現にアラン・ソーカルの揶揄を招き寄せる隙があったことは否定できない。しかしラカンの数理表現には瞠目すべきものがあり、より深い数学的な吟味が必要である。本書の後半二つの章は、このラカンの数理表現の数学的に一貫した可能性を開示する。

レヴィ＝ストロースが処女作『親族の基本構造』に、同世代のフランス数学を代表するアンドレ・ヴェイユによるオーストラリア先住民の婚姻規則を代数の群で表現した章を挿入したことも周知であろう。レヴィ＝ストロースの構造概念はヴェイユを初めとする数学者集団ブルバキの構造概念と深く共振していた。

ドゥルーズの数理表現はより微妙である。後に述べる彼の哲学の基本概念の一つ、差異 *différence* は、微分 *différentielle* 概念と通底している。彼は自らの哲学の展開に差異と微分の関係を利用した。しかしこの展開が彼の哲学を理解する上で最も難解な箇所であることも否定できない。ソーカルの揶揄からドゥルーズの哲学さらには数理表現をどのように救い出すか、本書が挑戦する開かれた問いである。

フランス現代思想の当事者たちは、何故これほどにも数理表現に情熱を傾けたのだろうか。それは同時代のフランス数学のある運動が世界を席卷する勢いだったからではないか。ラカン、クロソウスキー、レヴィ＝ストロースたちと同世代のフランス数学は、ヴェイユを初めとする数学者たちの秘密結社ブルバキを結成し、数学の体系を根底から再編する『数学原論 *Éléments de mathématique*』シリーズを次々書き下ろしていた。ブルバキ『数学原論』の影響は凄まじく、20世紀の数学の叙述の方法、さらには教育の方法に決定的な変化をもたらした。

ブルバキ『数学原論』の基本的な発想は、数学を、言語と同様に、構造として捉えることにある。ブルバキは数学の基本構造として、順序構造、代数構造、位相構造の三つを挙げた。順序構造とは、反射律、反対称律、推移律で定義される順序関係の構造、代数構造とは、演算の内閉、結合律、単位元の存在、逆元の存在で定義される集合すなわち群の構造（及び群を部分として含む構造）、位相構造とは、自らの部分集合の無限の合併が再び自らの部分集合であり、その有限の交叉もまた部分集合である集合すなわち位相空間の構造

である。ブルバキはこれら 3 構造を、それぞれ関係、代数、幾何の基本構造と考えた。

フランス現代思想の構造主義（いわゆるポスト構造主義を含む。ポスト構造主義を構造主義から区別すべきいかなる理由も存在しない。）は、フランス現代数学ブルバキの構造主義に決定的な影響を受けている。それが彼らの自然言語による諸概念を数理言語によって表現しようとする情熱を惹き起こしたのである。

本書はこのフランス現代思想の数理表現への情熱がユーラシア大陸の凍土の壁を乗り越えて伝遷した結果である。そして本書はフランス現代思想の数理表現へのアメリカ大陸の科学主義者ソーカルの揶揄が不可能になるまで数理表現を洗練する。

本書がフランス現代思想の数理表現のために用いる数理は、自らの部分集合（開集合と呼ばれる）がそれぞれユークリッド空間と同相（位相空間の開集合からユークリッド空間への連続写像とその逆写像が存在し連続であること）である位相空間としての多様体、その多様体に作用する群としての構造群、多様体を構造群の作用によって分割した同値類の集合としての商空間の 3 概念である。ただし同値類とはある集合を同値関係（順序関係の反対称律を対称律に置き換えた関係）によって分割したその部分集合であり、この同値類の集合を商集合あるいは商空間と呼ぶ。

これら多様体、構造群、商空間の 3 概念は一纏めにしてファイバー束分けても主ファイバー束と呼ばれる。主ファイバー束という概念には、ブルバキの位相構造の例である多様体、代数構造の例である構造群、順序構造ならぬ（反対称律を対称律に置き換えた）同値構造の系である商空間の全てが顔を揃える。言わばブルバキの構造主義を丸ごと引き受けた概念である。

フランス現代思想のキーワード、モクレは欲動、構造、仮象の 3 概念だった。本書はこの欲動を多様体で、構造を構造群で、仮象を商空間で表現することを試みる。言い換えれば本書はフランス現代思想を主ファイバー束という数理で表現する試みである。

この試みがこの第 1 章の記述で完全に理解出来てしまった向きがおられるなら、以下の 8 章は冗長である。もしそうでないとすれば以下の 8 章は読者にかなり面白い物語をお聴かせ出来るだろう。続く第 2 章ではソシュール、第 3 章ではラカン、第 4 章ではドゥルーズへの僕なりの読みを書き記す。フランス現代思想のキーワード、モクレは欲動、構造、仮象であるという僕の読みは本当に適切なのだろうか。

本書の中心である第 5 章では多様体、構造群、商空間の 3 概念を日本の中等教育の水準から出発して能う限り丁寧に解説する。主ファイバー束などという字面に怖気付いてはならない。数学は所詮数学だ。順を追って理解して行けば理解できないことは何もない。その上で第 5 章では欲動を多様体、構造を構造群、仮象を商空間で表現するフランス現代思

想の数理表現を提示しよう。

続く第6章では構造群の例としてリー群、第7章では多様体の例として球面、第8章では商空間の例として射影空間を取り上げる。数学のどんなに抽象的な概念も具体例が命だ。数学者たちはいかにも抽象的な概念を操作する時、実は具体例を念頭に置いている。この第7章と第8章において、ラカンの数理表現が主ファイバー束という数理の地平に置いて見れば驚くほど適切な表現であったことが明らかになる。

さていよいよ最後の問いである。欲動を多様体、構造を構造群、仮象を商空間で表現することによって何がもたらされ、一体どのような意味があると言うのか。第9章ではこの問いが問われる。実はそれまでの8章でこの問いを問う手掛かりは全て与えられる。読者は8章までに与えられた手掛かりを元にご自身なりの答えを考えて見ていただきたい。その上で第9章を読むと僕の答えとの差異が明らかになるだろう。僕はいまその差異をそのまま肯定する他はないと思っている。

5.5 欲動、構造、対象

フランス現代思想の帰結は多岐に渡るが、中でも特筆すべき、フランス現代思想が後世に語り継がれるだろう最大の帰結は、人間が何ものからも自由で能動的な主体ではありえず、欲動に駆動され構造に構成される受動的な対象だという帰結である。したがって人間が自由な能動の主体に見えるのは見せ掛け、見掛けすなわち仮象に過ぎない。人間は先ず何よりも欲動に駆動される無意識の主体 S の対象 a である。その欲動、無意識の主体 S が構造、大文字の他者 A によって差異化され分割されて初めて、人間は対象 a に映る鏡像としての自我 a' に構成される。したがって人間は欲動、無意識の主体 S を構造、大文字の他者 A で分割した仮象、対象 a である。

このフランス現代思想のメタファーを数理という言葉に探れば、欲動、無意識の主体 S を多様体、構造、大文字の他者 A を構造群、仮象、対象 a を商空間で表現する誘惑に駆られないだろうか。すなわち欲動 *Pulsion*、無意識の主体 *Sujet de l'inconscient* を多様体 P 、構造 *Structure*、大文字の他者 *le grand Autre* を構造群 G 、仮象 *Apparence*、対象 *Objet, le petit autre* を商空間 B で表現する。

このとき人間は欲動を構造で分割した仮象であるというフランス現代思想の帰結は、多様体 P を構造群 G で分割した商空間 B が人間であるというメタファーで表現される。すなわち

$$Pulsion/Structure \equiv Apparence$$

というフランス現代思想の帰結は、

$$P/G \cong B$$

という主ファイバー束で表現される。

ラカンのマテームを使用すれば、

$$S/A \cong a$$

というラカンの帰結は、

$$P/G \cong B$$

という主ファイバー束で表現される。

僕にはフランス現代思想の欲動を構造で分割した仮象としての人間、あるいはラカンの無意識の主体を大文字の他者で分割した対象としての人間という思想は、多様体を構造群で分割した商空間という数理を予期していた、あるいは待っていたとしか考えられない。それ程までに欲動、構造、仮象のメタファーとして多様体、構造群、商空間の数理は適切である。

欲動、構造、仮象のメタファーとして多様体、構造群、商空間の数理を用いることに何かいいことがあるのか。実は多様体を構造群で分割した商空間

$$P/G \cong B$$

という数理が、欲動を構造で分割した仮象という思想を

$$\text{Pulsion/Structure} \cong \text{Apparence}$$

と表現することを可能にした。

すなわち欲動を構造で分割するという思想が多様体を構造群で分割するという数理メタファーによって明晰となり、分割の結果が仮象であるという思想が分割の結果が商空間と同型であるという数理メタファーによって明晰となった。数理メタファーはフランス現代思想を日常言語で語るより遥かに明晰にした。「数理でなければ明晰でない *Ce qui n'est pas mathématiques n'est pas claire.*」。

もちろん読者の中には数学をメタファーとして用いるという方法それ自体に違和感を覚える向きもあることは十二分に承知している。数学をデータによって実証可能な理論の記述の方法だと考える向きである。数理モデルとは何かについて議論を組み立てることは可能であろう。数理モデルはメタファーなのか検証可能仮説なのか。しかしその議論は最終

章まで持ち越そう。ここでは数学者自身の中にも数学をメタファーと考える人のいることを指摘するだけに留める(Manin, 2007, p. 28)。

フランス現代思想のメタファーとして主ファイバー束の数理が適切であることをたとえ容認したとしても、これによってたとえばラカンの分割された主体\$のメタファーがメビウスの帯であることや、幻想のマテーム\$◇aのメタファーが交差帽であることの理解がどれ程進むと言うのか。メビウスの帯や交差帽といった多様体は商空間 B として現われる。したがってラカンのマテームとそのメタファーであるトポロジーを理解するためには、より具体的な多様体、構造群、商空間を考える必要がある。そこで次章では構造群の具体化としてリー群を、第7章では多様体の具体化として球面を、そして第8章では商空間の具体化として射影空間を考える。このように主ファイバー束を具体化することによって、ラカンのマテームとトポロジーは驚くほど適切な表現であったことが明らかになる。

9.1 数理メタファー、他の読み、実証科学

本書のテーマはフランス現代思想の数理メタファーだった。ある思想、ある言説のメタファー分けても数理メタファー *métaphore mathématique* とは何か。メタファーとはある事態をそれとは異なる他の事態によって喩える、表現することに他ならない。たとえば「パウロはライオンである」と言う。もとよりパウロはキリスト教最初の宣教者であり、ライオンである筈もない。そのパウロをライオンであると言う。このときライオンはパウロのメタファーである。

フランス現代思想は差し当たり日常言語で語られた哲学である。欲動も構造も仮象も日常言語から採られた概念である。この概念群を数理言語で喩える、表現する。それがフランス現代思想の数理メタファーである。本書では欲動を多様体、球面に喩え、構造を構造群、リー群に喩え、欲動を構造で分割した仮象としての人間を商空間、射影空間に喩えた。多様体、球面、構造群、リー群、商空間、射影空間が欲動、構造、仮象の数理メタファーである。

本書第1章で、書かれたテキストは読まれることによって完成する、したがってテキストはその読みが書かれることによって新たな読みに開かれて行くと述べた。あるテキストの数理メタファーを詠むことは、そのテキストのもう一つの読み、他の読み *une autre lecture* を示すことに他ならない。数理メタファーを詠むことは読むことの一つの在り方である。日常言語で書かれたテキストを数理言語のメタファーで詠むことによって読む。僕の読むという作業はそういう作業だ。

この数理メタファーをある対象の数理モデルと重ね合わせたくなる向きもあろう。なる

ほど数理モデルは数理メタファーの一つの在り方であるとも解釈出来る。しかしそう考えた場合、即座にその数理モデルの妥当性、その数理モデルが対象の適切なモデルとなっているか否かが問われよう。およそ実証科学 *science positive* と呼ばれる営為は、自らのモデルの妥当性、自らのモデルが対象のデータによって差し当たり偽ではないことが実証され続けられることに自らを賭ける営為である。

しかし数理メタファーの妥当性は、数理モデルと同様に、対象のデータによって検証可能なのだろうか。言説の妥当性は、対応するデータによってのみその真偽が判定されるのか。データによる検証とは全く異なる妥当性判定の方法が存在するのではないか。

9.2 生きられた時、過ごされた時、民主主義

数理メタファーが妥当であるか否かは、そのメタファーが対象である僕の経験をいかに適切に表現しているかに掛かっている。そもそも数理メタファーの対象はフランス現代思想の概念群であったが、そのフランス現代思想の概念群、欲動も構造も仮象も、僕の極私的な経験である、愛 *amour* と読み *lecture* と過ごされた時 *temps passé* を哲学的に把握するための概念群であった。したがって数理メタファーの妥当性は、僕の極私的な愛の経験、読みの経験、過ごされた時の経験をいかに適切に表現しているかに掛かっている。

こうした妥当性判定の方法は、僕が発見したわけではない。ヨーロッパ思想史においてこうした妥当性判定の方法は、ニーチェに端を発し、ベルクソンを経由して、ドゥルーズに連なる生の哲学 *philosophie de la vie* の伝統、それとは多少趣を異にするフッサール以来の現象学、生世界 *monde de la vie* と、それを継承したメルロー＝ポンティの生きられた世界 *monde vécu* の系譜に見られよう。本書ではベルクソンとフッサール双方の影響を受けて独自の生きられた時 *temps vécu* 論を展開したウジェーヌ・ミンコフスキー *Eugène Minkowski* (Minkowski, 2013, pp. 19-22)を推奨したい。

僕の生きられた時がその数理メタファーの是非を判定する。僕の愛、僕の読み、僕の過ごされた時が、それを多様体、球面、構造群、リー群、商空間、射影空間で表現することの適切さを判定する。したがって適切な数理メタファーは人の数だけ存在する。

ここで極めてありそうな誤解を解いて置こう。たとえば僕の過ごされた時がそれを商空間あるいは射影空間で表現することの適切さを判定すると言った時の僕とは何かという誤解である。

ここに言う僕はデカルトの言う自我ではない。すなわち僕は合理的な意識でも選択する主体でも自由な魂でもない。僕は欲動に駆動され構造に構成される受動的な身体である。霊魂ではなく身体、それが僕である。したがって生きられた時とは僕が身体として生きら

れた時である。だから生きられた時は受動態であらねばならない。生きられた時は自我が意識的に主体的に自由にすなわち能動的に選択した時ではない。生きられた時は受動的に過ごされた時である。

さて適切な数理メタファーは人の数だけ存在すると言うと、必ずこう考える向きがおられよう。では真理は何処にあるのかと。前節で述べたようなデータによる検証の道は閉ざされている。いわゆる実証科学においても、科学理論がデータによって反証されるケースは実は稀であり、科学理論は科学者集団のラング、構造、科学哲学で言うパラダイムに過ぎないケースがほとんどである。その場合、何が真理を担保するのか。それは科学者集団の合意、真理の民主主義 *démocratie de la vérité* である。

まさか真理が多数決で決まるものかと思われるかも知れないが、この真理の民主主義は英米圏の科学哲学では真剣な議論の対象となっている。本書の言う真理論、数理メタファーの妥当性は僕の生きられた時によってのみ判定されとする考え方は、この真理の民主主義に真っ向から抗う。たとえ科学者集団の僕を除く全員が多数決で真理を決定しようとも、僕の真理は僕の生きられた時によってしか決定しえない。民主主義に僕の人生は奪えない。では実証科学に抗い民主主義に抗う、この戦いに何かいいことはあるのか。

9.3 受動性、私の愛、能動性

人間は欲動に駆動され構造に構成される受動的な対象であった。受動性 *passivité* とは、感じる、受ける意味の語幹 *-pass-* から派生した形容詞 *passif* の名詞形であり、情熱し受苦すること *passion* と同根の言葉である。人間はまさしく欲動を感じ情熱し構造を受け受苦する受動性に他ならない。

この人間了解が、人間は無意識の欲動から自由な意識であり、社会的無意識の構造から自立した主体であるとする人間了解と真っ向から対立することは明らかである。人間が自由な意識を有する自立した主体であるとする人間了解は、人間が能動性 *activité* であることを称揚する人間了解に他ならない。

この人間は受動性であるか能動性であるかを巡る人間了解の対立は広く深い射程を持っている。僕の愛 *mon amour* を反省して見れば、そもそも僕を駆動する欲動は何処から来たのか。僕を構成する構造は何処から来たのか。言うまでもなく欲動は個人的無意識として僕に内在し、構造は社会的無意識として僕に内在する。しかしそれら欲動も構造も生まれながらの僕の身体に内在していたのでは全くない。生まれながらの身体がその生み落とされた社会と接触するただ中で欲動も構造も僕の身体に住み着くことになったのである。

それでは欲動と構造は何処から僕の身体にやって来たのか。思えば市場とは欲動の交換

される場所であった。経済学者は欲動が先行してその後に市場で交換されるという絵を描きたがるが、事態はむしろ逆である。市場における欲動の交換が、そこに生み落とされた身体に欲動を喚起する。すなわち僕の欲動は僕の身体が市場のただ中に生み落とされることによって市場から備給される。市場こそが僕の身体に欲動を言い換えれば需要を覚醒するのである。

再び思えば慣習、慣行、慣用が構造を生成するのであった。僕の生み落とされた社会の慣習が僕の身体に構造を教育する。こちらの方はあまりに当たり前なので言うほどのこともない。僕の欲動と構造は僕の身体が生み落とされた社会の市場と慣習によって与えられる。人間はまさしく社会的身体すなわち市場的身体でありかつ慣習的身体である。

これに対して人間の能動性を称揚する人間了解は何をもたらすか。実証科学は人間の能動性の精華である。実証科学は自らの知識がその対象データを能動的に採取することによって検証されると考える手続きである。したがって実証科学はデータによって検証された自らの知識を、たとえば市場への政策的介入に応用しようとする。市場におけるある政策与件を変化させれば市場にいかなる変化が生じるか、その帰結をデータから予測し、政策の効果を検証する。

民主主義もまた人間の能動性の謳歌である。社会の慣習、慣習法に「改革」が必要だと考えられるならば、民主主義的手続きによって新たな立法、制定法を作ればよい。「改革」こそ、新立法こそ社会に向けられた人間の能動性の発露である。

しかし実証科学の応用としての市場への政策介入に果たして効果はあるのか。民主主義による新立法、「改革」によって果たして新秩序は生じるのか。グローバル市場における滔々たるモノ、ヒト、カネの奔流に、政策介入など呑み込まれ何の効果ももたらさないのではないか。慣習国際法の支配の下に、民主主義的制定法たとえば日本国憲法9条2項など何の効力も持たず、個別的又は集団的自衛のための戦力保持は合憲と解釈されるのではないか。人間の能動性など自生的秩序としての市場と慣習法の前に全く無力なのではないか。

結局の処、実在しているのは市場と慣習法、それと市場に駆動され慣習法に構成される受動性の身体のみであって、実証科学を応用した市場への政策介入も、民主主義に基づく制定法による新秩序も、それらを合理的にデザインし自由に選択する能動性の主体も、単なる幻想に過ぎないのではないか。人間の受動性の哲学が教えてくれるのはこれらのことである。したがって受動性の哲学のスローガンはこうなろう。「なるに任せよ、過ぎるに委ねよ *Laissez faire, laissez passer* (レッセ・フェール、レッセ・パセ)」。

註

(1) [編集部註：本論での節番号及び節題は本論タイトルにある著作の節番号及び節題に対応していることに注意されたい。]

文献

[編集部註：以下の文献リストは本書『構造主義の数理』の理解にとって重要となる文献を挙げたものである。そのため、ここには、本論において言及されていない文献も記載されている。]

Chemama, R. & Vandermersch, B. (2018). *Dictionnaire de la Psychanalyse*, Paris : Larousse. (2002, 新宮一成他訳, 『精神分析事典』, 弘文堂.)

Deleuze, G. (1968). *Différence et répétition*, Paris: Presses Universitaires de France. (2007, 財津理訳, 『差異と反復』, 河出書房新社.)

Descartes, R. (2009). *Discours de la Méthode*, Paris: Gallimard. (1997, 谷川多佳子訳, 『方法序説』, 岩波書店.)

Kelsen, H. (1952). *Principles of International Law*, New York: Rinehart & Company Inc. (2016, 長谷川正国訳, 『国際法原理論』, 信山社.)

Lacan, J. (1966). *Écrits*, Paris: Éditions du Seuil. (1972, 1977, 1981, 佐々木孝次他訳, 『エクリ I, II, III』, 弘文堂.)

Manin, Y. I. (2007). *Mathematics as Metaphor*, Providence: American Mathematical Society.

Mashaal, M. (2017). *Bourbaki: Une société secrète de mathématiciens*, Paris: Éditions Belin. (2002, 高橋礼司訳, 『ブルバキ——数学者達の秘密結社』, シュプリンガー・ジャパン.)

Minkowski, E. (2013). *Le temps vécu*, Paris: Presses Universitaires de France.

森田茂之 (2005). 『微分形式の幾何学』, 岩波書店.

落合仁司 (1987). 『保守主義の社会理論——ハイエク・ハート・オースティン』, 勁草書房.

—— (2011). 『カントル——神学的数学の原型』, 現代数学社.

—— (2017). 『社会的事実の数理——デュルケーム、モース、レヴィ=ストロース』, 勁草書房.

Saussure, F. de. (2016). *Cours de linguistique générale*, Paris: Éditions Payot & Rivages. (2016, 町田健訳, 『一般言語学講義』, 研究社.)

寺田至・原田耕一郎 (2006). 『群論』, 岩波書店.

[同志社大学]